

令和 5 年 5 月 20 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01271

研究課題名(和文)日本語学習者による多義語コロケーションの習得

研究課題名(英文)The Acquisition of Collocations within the Polysemous Verb Constructions by Learners of Japanese

研究代表者

大神 智春(OHGA, Chiharu)

九州大学・留学生センター・教授

研究者番号：50403928

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 6,910,000円

研究成果の概要(和文):日本語教授法及び語彙学習教材開発を支える基礎研究としてコロケーション(collocation 連語)の習得を対象とし、今まで焦点が当てられなかった「多義語の各語義で形成されるコロケーションをどのように習得していくか」について調査・分析を行った。
その結果、上級レベルの学習者は語の意味等について独自に「イメージ」を形成し、イメージ内おさまるコロケーションは習得が進みやすいことが示唆された。また上級レベルでは「当該表現を見聞きしたことがあるかどうか」を大きな手掛かりとしてコロケーション使用を判断していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

次の点において学術的意義があると言える。先行研究では焦点が当てられていなかった「多義語を持つプロトタイプ的語義や派生的語義で形成されるコロケーションをどのように習得していくか」について解明した点。上級レベルの学習者は日本語のコロケーションの使用可否を判断する際「当該表現を見聞きしたことがあるかどうか」を大きな手掛かりとしていることを明らかにした点。これは先行研究では実証的に検証されていなかった点である。

本研究の結果を活用・援用することで、学習者が効果的に学習を進めていくことができる日本語教授法や語彙学習教材を作成できると考えられる。この点において社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文):As basic research to support the development of Japanese language teaching methods and vocabulary learning materials, we investigated and analyzed the acquisition of collocations formed by polysemes, which has not been the focus of previous research.

Results suggest that advanced-level learners form their own "images" of the meaning of words, and that collocations that fit within these images are more easily acquired. It was also revealed that advanced-level learners use "whether or not they have seen or heard the expression before" as a major clue in judging the use of collocations.

研究分野：第二言語習得研究、日本語教育研究

キーワード：多義語 コロケーション 中国語母語話者 中間言語 典型化 一般化 差異化 コーパス

1. 研究開始当初の背景

第二言語の語彙学習において、Nation (2001) 等はコロケーションを重要な学習項目の1つとしてあげている。コロケーション(連語)とは「傘をさす」「計画を立てる」のような「慣習によってまとまって使われる語の連鎖」を指す(大曾・滝沢 2003)。語彙教材開発においてもコロケーションをどのように盛り込むか検討する上で、学習者がどのようにコロケーションを習得しどのような点に困難を感じているか明らかにすることが重要な課題の1つとなっている。

中村(2011)によると、語彙習得の困難点は、(1)言語間的要因(母語と学習言語の相違)と(2)言語内的要因(形態的要因、語彙の文法特性、意味的要因)に分類することができる。日本語教育のコロケーション習得研究においては、誤用の原因を学習者の母語知識の関わりから探る(1)の研究が大多数を占めており、(2)については誤用分析により学習者が学習途上で形成するコロケーション知識の一部を調査した研究が少数見られる程度である。更に、近年のコーパス言語学の発展により様々な中心語で形成されるコロケーションを集散的に扱った量的研究は多くみられるが、1つの多義語を掘り下げその多義語で形成されるコロケーションをどのように習得していくかに焦点を当てた研究は管見の限りない。この学術的背景をもとに、本研究の土台となる大神(2016-2018)では、コロケーション習得途上で形成される中間言語を探る試みとして概念形成理論(田中・深田 1998)を取り入れ、多義語で形成されるコロケーションの習得過程について「典型化」(プロトタイプ形成)、「一般化」(多義性理解)、「差異化」(類義性理解)の観点から調査し、特に学習者の理解度が発達過程においてどのように変化するか分析した。このうち多義性理解については、単語の意味習得研究(松田 2004 など)では学習者の意味習得はプロトタイプの意味に留まる場合が多かったことが報告されているが、大神(2016-2018)では学習レベルが高くなると学習者の理解は拡張義及び拡張義で形成されるコロケーションまで深まりつつあることが観察され、先行研究と結果は一致しなかった。先行研究と大神(2016-2018)の結果の違いについては、調査対象語の性質が異なるのではないかと考えられるが、先行研究も大神(2016-2018)もヲ格を持つ動詞1語を調査対象語とした「ケーススタディ」に留まっており、他の性質を持つ多義語についてはどのように習得が進むかについて検証がなされていない。

もう1点課題として残ったのは、先行研究でも大神(2016-2018)でも、学習者が実際に調査対象語についてどのようなコロケーションを使用しているか、その使用実態までは明らかにしていないという点である。しかし「どのようなコロケーションを産出できるか」は学習者が構築する中間言語の重要な一側面であり、学習者の産出面も加えた分析・考察が必要である。

2. 研究の目的

上記記述を研究背景とし、本研究では第一に概念形成理論の枠組みを用い「典型化」「一般化」の観点からコロケーション習得の理解的側面を明らかにすることを目的とした。また、第二に学習者のコロケーション使用実態という産出的側面を明らかにすることを目指した。尚、概念形成理論には「差異化」も含まれるが、本研究では調査対象者が考える「プロトタイプ」(基本的語義)及び「非プロトタイプ」(周辺の語義)とコロケーション習得の關係に焦点を当てることから、プロトタイプ・非プロトタイプに直結しない「差異化」(類義性理解)は調査対象外とすることにした。

本研究では具体的には下記の課題を設定した。

(1)多義語で形成されるコロケーションについて、学習者はどのような知識を構築しているか(理解面)。

「典型化」(どのような語義を基本的だと考えているか)

「一般化」(多義的な意味を持つ中心語で形成されるコロケーションを理解できるか)

(2)学習者は調査対象語のどの語義で形成されるコロケーションを使用しているか(産出面)。

尚、「何をもって日本語の基本的語義あるいは周辺の語義とするか」により調査結果に相違が出る可能性があることから、本研究では学習者と生活環境の近い日本語を母語とする大学生(以下「母語話者」)が考える語義体系を基準とすることとし、第三の観点として母語話者に対して以下の(3)を実施した。

(3)母語話者が考える調査対象動詞の基本的語義はどのようなものか。また基本的語義と周辺の語義をどう位置付けているか。

3. 研究の方法

コロケーションの中心語とする調査対象動詞は、寺村(1984)の動詞分類をもとに「ある」「きる(切, 斬, 伐)」「する」「でる」「つける(付, 附, 着, 点, 就)」の5動詞を選定した。調査対象者は日本在住の中国語を母語とする大学生で日本語レベルが上級の者を対象とした。

調査方法は以下の通りである。

(1)理解面:

「典型化」: 最も基本的だと感じる語義で短文を書いてもらう短文作成課題を実施した。その後各語義の出現数を集計し分析を行った。

「一般化」：該当名詞が調査対象動詞と一緒に使えるかどうかを問うフレーズ性判断課題を行った。分析は、平均点、正答率、標準偏差を算出するとともに学習者の回答傾向を探るためクラスター分析を行った。またフォローアップインタビューにより被験者がどのように考えて回答したか尋ねた。

(2)産出面：国立国語研究所が開発した「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(International Corpus of Japanese as a Second Language)」(I-JAS)を用い、調査対象語で形成されるコロケーションの出現数を集計した。その後、語義別に調整頻度、共起語異なり語数、Guiraud値を算出するとともに学習者と母語話者の結果を比較するため二乗検定を行った。

(3)母語話者による語義体系：序列課題を行い、最も基本的な語義だと思ふものから意味的に最も遠いと感じられる語義を母語話者に順位付けてもらった。結果を集計し、被験者による各語義の順位付けの傾向を把握するためクラスター分析を行った。

(1)(2)(3)を行うため、辞書類をもとに5動詞の意味を表1~表5のようにグループ化した。また、(2)及び(3)の調査を実施するに当たり表1~表5のコロケーションを用いた。

表1 「する」の語義分類・調査対象コロケーション

語義0： 行為	電話をする 宿題をする あいさつをする 手伝いをする。 雑談をする	語義4： 様子・性質	どろぼうのような格好をする 暗い表情をする 怖い目をする 変な形をする いい暮らしをする	語義8： 決定	どちらにする 何にする 行くことにする ラーメンにする 14時にする
語義1： 生理現象・ 病気・けが	息をする あくびをする 病気を 病気がけが けがをする やけどをする	語義5： 変化	相手にする 医者にする ドルにする 26度にする 氷にする	語義9： 感覚	味がする 気がする 音がする 頭痛がする 予感がする
語義2： 職業・役割	医者をする 相手をする 司会をする 監督をする 教師をする	語義6： 思考・態度	楽しみにする なかったことにする バカにする 問題にする 頼りにする	語義10： 値段・時間	40万円もする いくらする 1時間もする 1年もする 20分する
語義3： 密着・接触	ネクタイをする 塩をする 手袋をする 化粧をする 首輪をする	語義7： 知覚	耳にする 手にする 目にする 口にする 気にする		

表2 「でる」の語義分類・調査対象コロケーション

語義0：外への移動	学生が教室をでる 彼が銀行をでる 列車がトンネルをでる 弟が家をでる 彼の母親が会社をでる	語義4：出勤・出店・出沒	店がでる 幽霊がでる 虫がでる 警察がでる 蚊がでる
語義1：突出	壁から釘がでる スポンから糸がでる 腹がでる 歯がでる 芽がでる	語義5：ものの発生	インクがでる 湯がでる 駐車券がでる 煙がでる 火がでる
語義2：離脱・卒業	田中さんはアパートをでる 息子の妻は大学をでる 私は町をでる 佐藤さんは医学部をでる 彼は実家をでる	語義6：露出	肌がでる 肩がでる 地面がでる 背中がでる 腕がでる
語義3：輩出	合格者が多くでる 大統領がでる 大臣がでる 有名人が多くでる 医者が何人もでる	語義7：結果の表示	患者が5人でる 目に障害がでる 問題がでる 無駄がでる 影響がでる

表3 「きる(切、斬、伐)」の語義分類・調査対象コロケーション

語義0： 分断(物)	材料をきる 野菜をきる 猫のひげをきる 糸をきる グラスをきる	語義3： 減少	一月(ひとつき)をきる 1%をきる 2人をきる 9秒をきる 1000円をきる	語義6： 除外	お湯をきる 選手をきる 無駄な部分をきる 油をきる 59点以下の者をきる
語義1： 分断(身体・人)	指をきる 人をきる 胃をきる 口の中をきる 敵をきる	語義4： 遮断・停止	電話をきる 保温をきる 暖房をきる 接続をきる スイッチをきる	語義7： 力強い動作	先頭をきる トップをきる スタートをきる カーブをきる ハンドルをきる
語義2： 進行	風をきる 空(くう)をきる 空気をきる 波をきる 流れをきる	語義5： 分断(事)	関係をきる 言葉をきる 文をきる つながりをきる 縁をきる	語義8： 批判	時代をきる 世の中をきる 政策をきる 腐敗をきる 社会をきる

表4 「ある」の語義分類・調査対象コロケーション

語義0: 存在(物)	机の上に写真がある 山に雪がある 空に星がある 袋に穴がある 駅前に広場がある	語義4: 所有(物)	金がある 車がある 財産がある めずらしい花がある 借金がある	語義8: 存在 (出来事・行事)	地震がある 事件がある いいことがある パーティーがある 講演会がある
語義1: 存在(事)	違いがある いい方法がある 栄義がある 限りがある 誤りがある	語義5: 所有(事)	私にいい考えがある 言いたいことがある 自信がある 用事がある B社とトラブルがある	語義9: 存在 (相手の行為)	恋人から電話がある Bさんからメールがある 80名の人から回答がある C社から提案がある スタッフから申し出がある
語義2: 立場・状況への 位置づけ	俳優が監督と対等の立場にある 父が社長の職にある 官僚が大統領と親戚関係にある 筆者が深い悲しみの中にある 彼女が苦しい境遇にある	語義6: 属性 (数量)	駅まで2キロある 高さが300メートルある 目が2つある 170センチある 20トンある		
語義3: 静的存在(人)	昔おじいさんがありました 辞退する人もある 参加者がある 相手がある 反対の議員もある	語義7: 属性 (期間・時間)	休みは3週間ある 何日ありますか 3か月ある 30年もある あと5分ある		

表5 「つける(付, 附, 着, 点, 就)」の語義分類・調査対象コロケーション

語義0: 接着	お互いの机をつける 窓に額(ひたい)をつける 紙のにりをつける 壁に耳をつける 床に膝(ひざ)をつける	語義5: 点火・起動	電気をつける ラジオをつける ストーブをつける 火をつける 電源をつける
語義1: 付属・発生・ 増加・付与	下着をつける 勢いをつける 値段をつける 文句をつける 付録(ふろく)をつける	語義6: 痕跡・記録	染み(しみ)をつける 傷をつける 足跡(あしあと)をつける 観察記録をつける チェックをつける
語義2: 停止・定着・ 決着・決定	岸にボートをつける 区切り(くぎり)をつける 勝負をつける 見当(けんとう)をつける 社長が話をつける	語義7: 接着 (液・粉末)	薬をつける 口紅をつける しょうゆをつける クリームをつける 香水をつける
語義3: 尾行	犯人をつける 夫の後(あと)をつける 前の車をつける 好きな女性をつける 不審人物をつける	語義8: 意識	体に気をつける 生活に気をつける 食べ物に気をつける あやしい人に気をつける あの選手に気をつける
語義4: 補佐	通訳をつける ガイドをつける 護衛(ごえい)をつける 家庭教師をつける 指導者をつける		

4. 研究成果

(1) 理解面

「典型化」(短文作成課題)

学習者と母語話者に5つの調査動詞に対し最も基本的だと感じる語義で短文を書いてもらい、その結果を比較した。母語話者の5つの動詞の産出結果をみると、各語とも特定の語義に産出が集中しており、母語話者は各語の基本的語義に対して共通するイメージを持っていると推察された。一方、学習者の産出語義は、「する」では基本的語義に回答が集中していたものの「する」以外の動詞は、母語話者に比べると回答が分散する傾向にあった。学習者については母語話者ほど基本的語義として固定的なイメージが形成されていないと考えられる。学習者は各人が置かれている言語環境で接触頻度が高いものを基本的語義として想起しやすいためだと考えられる。

「一般化」(フレーズ性判断課題及びフォローアップインタビュー)

5動詞のどの語義で形成されるコロケーションの理解が進んでいるか、あるいは理解が進んでいないか明らかにするとともに、習得の度合いに差が生じる理由を探った。

フレーズ性判断課題とフォローアップインタビューから、学習者は各動詞の意味について固定的ではないものの独自のイメージを形成していることが窺え、そのイメージに基づきコロケーションの意味を判断していることが示された。そして学習者が持つ各動詞の意味についての独自のイメージの範囲内におさまるコロケーションについては周辺の語義も含め習得が進みやすいが、イメージと乖離するものについては習得が進みにくいことが示唆された。また、他の動詞との結びつきが強い名詞を含むコロケーションも理解が進みにくいことが明らかになった。例えば「電話」は「かける」という動詞と共に使うものであり「電話」と「する」の組み合わせは不適切であると回答した学習者がいた。

以上の結果に加え、コロケーションの意味判断には当該表現を見聞きしたことがあるかどうかを手がかりにしている学習者も多いことが明らかになった。大神(2021)などの先行研究ではコロケーションの習得には教材等での学習の有無や日常生活等での接触頻度等が関わっていると考察されていたが、今回の調査におけるフォローアップインタビューでその点を明確に確認することができた。

(2) 産出面 (I-JAS を用いた分析)

学習者は5動詞のどの語義で形成されるコロケーションを産出しているか、そして学習者が

用いる共起名詞にはどのような特徴があるかについて I-JAS を用いて調査した。

全体的に学習者は中心義(辞書等による第一義)で形成されるコロケーションを母語話者よりも多く産出していた。また学習者は動作を表す名詞や具体的な内容を表す名詞(実質名詞)を母語話者よりも多く共起させるとともに限定的な共起語を繰り返し使用する傾向があることが明らかになった。一方、学習者における中間言語の産出的側面では、派生的・抽象的な語義で形成されるコロケーションの産出は習得していないか避ける傾向にあることが示唆された。

(3)母語話者による語義体系(序列課題)

母語話者がどのように多義語の語義体系を考えているかについて調査を実施した。その結果、母語話者が考える基本的語義と辞書等に記載されている中心義は共通していたが、それ以外の周縁的語義については、いくつかの語義において辞書類とは異なる位置付けが確認された。

(4)研究の統括

まとめ

本研究により次の点が新たに明らかになった。

(a)「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、学習者によるコロケーションの習得の理解面においてはプロトタイプの意味、すなわち本研究でいう基本的語義で形成されるコロケーションに留まる場合が多いという先行研究と、学習レベルが高くなると学習者の理解は派生的語義によるコロケーションにまで及ぶという先行研究が見られ、結果は一致していなかった。しかし本研究により基本的語義か派生的語義かという対立ではなく、学習者が独自に形成している語の意味についての「イメージ」の範囲内におさまるコロケーションであるかどうか習得の理解面に影響していることが示唆された。

また、学習者が名詞 A は動詞 B との結びつきが強いと感じている場合、その他の動詞との結びつきについて習得が進みにくいことも明らかになった。この点から、上で述べた語の意味についての「イメージ」も含め学習者は当該語に関する独自の知識体系を形成していることが示唆された。

(b)コロケーション習得に関する先行研究では、コロケーション習得に影響を与えるその他の要因として教材等での学習の有無や日常生活等での接触頻度等が考察されているが実証的な検証はされていなかった。本研究では学習者にフォローアップインタビューを実施し被験者がどのように考えて判断したかを探った。その結果、上級レベルの学習者は「当該表現を見聞きしたことがあるかどうか」を大きな手掛かりとして判断していることが確認できた。

また、今回、母語知識を意識的に使用しているという上級レベルの学習者は殆どいないことが確認された。上級レベルになると母語と目標言語の違いについての理解が進むことから意識的に母語知識を使用することはあまりなくなると考えられる。

今後の課題

本研究により解明できた点を教材開発に還元するために、今後、更に以下の研究を行う予定である。

(a)コロケーション習得に影響を与える要因の1つとして学習したことがあるかどうかも含め当該表現の接触頻度が関わっていることが明らかになった。しかしどのコロケーションがどのレベルで導入されるかのガイドライン等は特になく、また、初級～上級の教科書等で多義語のどの語義で形成されるコロケーションが導入されているかについて明らかにした研究はまだないようである。今後、この点を明らかにする予定である。

(b)学習者の日常生活等で使用頻度の高いコロケーションは授業や教材等で学習できることが望ましい。しかし、そのようなコロケーションが初級～上級の教科書等に盛り込まれているかを検証した研究はないほうである。この点も今後明らかにする予定である。

<引用文献>

- 大神智春(2021)『日本語学習者による多義語コロケーションの習得』ひつじ書房。
大曾美恵子・滝沢直宏(2003)「コーパスによる日本語教育の研究ーコロケーション及びその誤用を中心にー」『日本語学 5』 pp.234-244 鈴木(2014)
田中茂範・深谷昌弘(1998)『<意味づけ論>の展開 状況編成・コトバ・会話』紀伊国屋書店
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
中村嘉宏(2011)「語彙習得の諸相」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』vol.15, No.2 佐賀大学 pp.34-54
松田文字(2004)『日本語複合動詞の習得研究 認知意味論による意味分析を通して(シリーズ言語学と言語教育)』ひつじ書房
Nation.I.S.P.(2001) *Learning vocabulary in another language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 麻生迪子、菊池富美子、森田淳子、大神智春、鈴木綾乃	4. 巻 23
2. 論文標題 日本語学習者横断コーパス（I-JAS）に見られる多義語コロケーションの分析 - 「きく」「でる」「つける」に焦点を当てて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 38-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木綾乃・大神智春	4. 巻 182
2. 論文標題 日本語学習者横断コーパス（I-JAS）に見られる多義語コロケーションの産出 動詞「する」「ある」に焦点を当てて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 95-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大神 智春・森田 淳子・麻生 迪子・鈴木 綾乃・林 富美子	4. 巻 vol.29, NO.1
2. 論文標題 日本語学習者・母語話者が考える多義動詞の基本的語義とは何か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会会誌	6. 最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林富美子、鈴木綾乃・麻生迪子・森田淳子・大神智春	4. 巻 25
2. 論文標題 日本語母語話者による多義動詞の意味体系 「する」「ある」に焦点を当てて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 74-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田淳子・麻生迪子・大神智春・鈴木綾乃・林富美子	4. 巻 15
2. 論文標題 日本語母語話者による多義動詞の意味体系 「でる」「きる」「つける」に焦点をあてて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第 JSL 漢字学習研究会誌	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 林富美子、鈴木 綾乃、麻生 迪子、森田 淳子、大神 智春
2. 発表標題 日本語母語話者による多義動詞の意味体系 「する」「ある」に焦点をあてて
3. 学会等名 第25回外国語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森田淳子、麻生迪子、大神智、鈴木綾乃、林富美子
2. 発表標題 日本語母語話者による多義語の意味体系 - 「でる」「きる」「つける」に焦点をあてて -
3. 学会等名 第91回 JSL 漢字学習研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木綾乃、大神智春、森田淳子、林富美子、麻生迪子
2. 発表標題 日本語学習者横断コーパス (I-JAS) に見られる多義語コロケーションの産出 - 動詞「する」「ある」に焦点を当てて -
3. 学会等名 第11回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 麻生迪子、菊池富美子、森田淳子、大神智春、鈴木綾乃
2. 発表標題 日本語学習者横断コーパス (I-JAS) に見られる多義語コロケーションの分析 - 「きく」「でる」「つける」に焦点を当てて -
3. 学会等名 第24回外国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大神 智春・森田 淳子・麻生 迪子・鈴木 綾乃・林 富美子
2. 発表標題 本語学習者・母語話者が考える多義動詞の基本的語義とは何か
3. 学会等名 第59回日本語教育方法研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大神 智春・鈴木 綾乃・林 富美子・麻生 迪子・森田 淳子
2. 発表標題 日本語学習者による多義語コロケーションの理解 「する」「ある」に焦点をあてて
3. 学会等名 第26回外国語教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 麻生 迪子・大神 智春・森田 淳子・林 富美子・鈴木 綾乃
2. 発表標題 日本語学習者による多義語コロケーションの理解 「でる」「きる」「つける」に焦点をあてて
3. 学会等名 日本語教育学会2023年度春季大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 綾乃 (SUZUKI Ayano) (40812566)	横浜市立大学・グローバル教育センター・特任准教授 (22701)	
研究分担者	森田 淳子 (MORITA Junko) (50814430)	西南学院大学・その他部局等・助教 (37105)	
研究分担者	麻生 迪子 (ASO Michiko) (90625188)	四天王寺大学・人文社会学部・講師 (34420)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	林 富美子 (HAYASHI Fumiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------